

巻頭記事

Space Japan Review 編集委員会から



▲ある日の編集委員会

前列左から：植田剛夫、若菜弘充、北爪進

後列左から：風神裕、小淵知己、志垣雅文、石川博康

編集委員長 若菜弘充

ご購入ありがとうございます。Space Japan Review 誌編集委員長の若菜弘充です。2001年4月/5月号で、印刷誌からウェブ版での発行に切り替えて、すでに3年近くになりますが、遅れながらも何とか定期的な発行を継続させていただきました。当初は、記事にできる分野が衛星通信と限られていますし、専門の編集担当者もおりませんので、正直ここまで続くとは思っておりませんでした。読者の方々の温かいご支援と、編集委員会の方々のご協力の賜物と大変ありがたく思っております。他に同種の雑誌がありませんので、大変貴重な活動ではないかとあらためて思いかえしています。記事を取材すること、執筆をお願いすることは大変な作業ですので、これをお読みになって執筆をご希望される方は是非ご連絡ください。

通常は、原稿の収集と、いち早い発行ばかりを気にしておりますが、こうして挨拶を書くことになってみると、何か新たな抱負を考え出さなければなりません。定期発行はもちろんですが、まずは新しい企画を考えてみたいと思います。また英語版購読者を増やすこと。そのためには本雑誌の発行を広く知っていただくための広報活動が必要です。執筆していただいたご苦勞に報えるほど、読者数を拡大したいと考えています。記事の内容もそれに耐えうるような充実したものを目指していきたいと思います。乞うご期待を。本年もよろしく申し上げます。

編集副委員長 植田剛夫

本年もよろしくお願い申し上げます。相次ぐあつてはならぬ失敗で日本の宇宙開発は官民ともに「縮み指向」に陥っているようなのが気がかりです。情報収集衛星や準天

頂衛星に代表されるように、日本の宇宙は今や国と国民の安全保障やIT化を先導すべき事業であり、「縮こまっている」ヒマなどない筈。トラブルの真因は技術そのものよりも、正しいシステムマネジメントを妨げている体質にあるように思われ、早くばっさりとその体質を取り去って、着実な前進ペースを取り戻して頂くことを念じております。

わが身に戻って「スペース・ジャパン・レビュー」誌編集担当としては、まず記事の内容を衛星通信事業者やメーカーの第一線の方に本当に興味をもって読んで頂けるレベルまで高めること、次に発行日遅れの慢性化を、せめて異常でない範囲にまで戻したいこと、の2点を目ざして反省、努力してまいりたいと思います。ぜひ厳しいご鞭撻を頂ければ幸いです。

編集特別顧問 北爪 進

日頃 SJR 御愛読頂き有難う御座います。

新年早々米国の大統領より“Back to the Moon”政策の発表があり宇宙開発に拍車がかかりそうなニュースが飛び込んできました。日本の宇宙開発は昨年来 H-IIA6号機の打ち上げ失敗、ADEOS-II の不具合など残念な出来事が続いています。しかし、衛星通信や衛星放送、GPS システム、気象衛星などの宇宙インフラは日本国民の日常生活や産業安全保障の点から深いつながりができて今や分離しては考えられない状態になっています。更にこれらは日本一国の問題ではなく広くアジア・太平洋地域、全世界レベルの問題として取り扱う状況となっています。新しい年は世界レベルでの宇宙開発協調体制が進むことを期待します。



▲ある日の編集委員会

編集委員 風神 裕

明けましておめでとうございます。少し時期がずれているようですが、1月22日は旧正月ということでもあり、まずは年頭の御挨拶をさせていただきます。

最近、私達のような衛星通信の集団を「朱鷺の会」と呼ぶ方がおります。理由を伺った所、「朱鷺＝絶滅種」とのことです。確かに、ICSSC-2004 の論文投稿状況などを見ていると、成る程という気にもなりますが、現状に甘んじている訳には行きませ

ん。

「スペース・ジャパン・レビュー」も今年で5年目に入ります。創刊当時から比べると、編集委員の顔ぶれも替わって来ました。また、内容も一部マンネリ化しているようにも見えますが、一方、「衛星通信と私」はたくさんの方々から面白い記事を投稿頂き、単行本化の意見も出ています。

2004年は、朱鷺から鳳、即ち、「朱鷺→鳳＝フェニックス」、不死鳥のように大空を羽ばたきたく、宜しく御支援の程御願申し上げます。

編集委員 小淵知己

本年も宜しくお願いいたします。世界のニュース編集の仕事始めて気が付いたら5年も続けていました。ここまで続けられたのは読者の皆様の支援のお蔭と感謝しております。その間の商用衛星市場を発注ベースで総括しますと、2000年35機、2001年28機、2002年7機、2003年11機とJFSC設立当初から1/3に衛星が減ってきています。理由は色々ありますが、地上部ブロードバンドとの競合で厳しい状況で衛星業界は厳しい状況にあります。しかしながら衛星には Digital Divides、Last One Mile の解消、或いは、DTH、移動体通信、測位、観測、深宇宙探査等衛星ならではの活躍分野があります。今年は明るい話題を提供できるように取材していきたいと思っております。

編集委員 志垣雅文

本年もよろしくお願い申し上げます。

今年は昨年にもまして「スペース・ジャパン・レビュー」誌の記事を充実したものにしていきたいと思っております。本業界の動きなどが分かりやすい形で記事にできればと思います。また、できるだけ広く取材をしたいと思っております。読者皆様のご協力もいただければより良い誌面になるのではないかと考えております。

最後に本年も皆様にとりよい年でありますように祈っております。

